

芭蕉のさと企画展

# 『甲州俳諧展(一)』

## 『芭蕉の後継者たち』

天和三年(一六八三)松尾芭蕉は、弟子であった秋元家の国家老・高山伝右衛門繁文(俳号樂塲)に招かれて谷村を訪れました。当時の甲州俳壇は、江戸俳人の岸本調和一門の影響下にありましたが、その後、芭蕉を敬慕し、芭蕉への回帰をめざす俳人たちによって新風を吹き込まれ、大きく揺れ動いていきます。

本企画展では、昨年の特別展「芭蕉・旅・甲州」に引き続き、芭蕉の谷村来訪後の甲州俳諧の進展について、享保年間(一七一六～一七三三)に甲州俳壇において指導的立場にあった俳人の山口黒露と、その周囲の人々の活動をおして紹介いたします。



山口素堂像  
〔『俳諧百一集』より〕



雁山(黒露)編『やすらい』より

会期	11月3日(土)～12月24日(月)
開館時間	午前9時～午後4時30分 (入館は4時まで)
休館日	毎週月曜日・第三火曜日・ 祝日の翌日 (ただし11月4日・24日・ 12月24日は開館)
入館料	一般 300円(210円) 高校・大学 200円(140円) 小・中学生 100円(70円)
(内は、20名以上の団体料金)	



問合先

都留市博物館

「ミュージアム都留」

☎(45)86008  
☎(45)86008

無料開放日のお知らせ  
11月20日(火)は、県民の日により無料開放いたします。  
どうぞ、来館ください。

ミュージアム都留寺子屋講座より  
第三回芭蕉月待講座「甲州に逃れた俳人たち」の要旨をご紹介します。

### 「山口黒露——本格的な甲州俳壇の形成①——」

享保十六年(一七三一)、五色墨連衆(長水、風葉、素丸、咫尺、蓮之)により「五色墨」が刊行されます。これは享保末から元文(寛保期(一七三六～一七四四))にわたる蕉風流行の契機をつくりました。

これより少し前、甲州では山口素堂ゆかりの人物といわれている俳人の山口黒露(当時の俳号は「雁山」)が祇空や淡々と親交をもちながら活動していました。五色墨連衆と交流のあった黒露の人生は、芭蕉復古の動きに大きく関わっています。

俳諧撰集「連俳睦百韻」によると、黒露の親は素堂の弟によって取り立てられ、山口姓を継ぎ、黒露は浅草蔵前の米屋に養子に入りますが、放蕩して養子先を潰してしまつたといえます。その後の享保十四年(一七二九)から十九年(一七三四)までの黒露の動向はほとんど分かりません。しかし享保十五年(一七三〇)に、駿河宇津谷(現在の静岡市)にそれまでの俳号である「雁山」の名を刻んだ自らの墓を建てています。これは「雁山」号と決別し、生まれ変わるための記念碑と考えられます。俳号を黒露と変え、享保二十年(一七三五)以降は駿河と甲斐に草庵を構えて活動を再開し、元文元年(一七三六)には江戸において俳諧撰集「燈花三吟」を五色墨連衆の長水(柳居)らの協力により刊行します。また、同年冬には駿河の門人たちのもとへ旅立ち、俳諧紀行「有渡日記」を出版します。このころには甲州・駿河に、黒露の俳諧集団が出来上がっていました。こうして多くの門人を抱えた黒露は、当時大都市で活動するか、大都市から地方へ下つてきて教えるかであった俳諧の宗匠の中において、地方出身でありながら地方に拠点を置き、俳諧だけで生計を立てることを可能とした最初の俳人となりました。

そして、蕉風俳諧をリードしていた五色墨連衆は、次々と黒露を訪ねて甲府を訪れ、時代にさきがけた文学活動を行ない、本格的な甲州俳壇が形成されていきました。